

第 26 回北東アジア地域研究会・国立民族学博物館拠点（月例会）報告

平成 30 年 12 月 27 日に国立民族学博物館において、第 26 回月例会「北東アジア地域研究会・民博拠点」を開催いたしました。館内構成員 3 名、外来研究員・総研大学院生 11 名、外部から 5 名の計 19 名が参加しました。

拠点代表の池谷和信教授によるイントロダクション“Climate Change and Nomadic Peoples in Afro-Eurasia”に続いて、2つの発表（およびコメント）が行われました。

名古屋大学大学院の篠田雅人教授が、“Developing an Early Warning System of *Dzud* for Sustainable herding in Mongolia”と題して、ゾドと呼ばれる寒雪害を中心に、モンゴルにおいて見られる災害の分析について発表しました。コメントとして立命館大学の富田敬大氏が近年見られる近郊圏の牧畜社会の事例を提示しつつ経済発展と減災の可能性を指摘しました。

牧畜民研究者として著名な Elliot Fratkin 氏が Climate Change and Nomadic Peoples と題して、主に東アフリカやモンゴル、極北を対象として、環境変化が牧畜民に与える影響とそれへの適応や紛争について発表しました。これに対するコメントとして阪南大学の渡辺和之氏は牧畜民社会の変化の事例を挙げながら、牧畜民にとっての環境変化が複雑であり、比較が必要であることを指摘しました。

